

平成 22 年度 第 2 回意見交換会報告

日時・場所：平成 22 年 12 月 4 日（土）14:00-17:00 ハピネス・ケア四谷

出席者（敬称略、順不同）：則行清美（中外テクノス）岩橋尊嗣（新エポリオン）小坂芳雄（環境管理センタ）

岡田誠之（東北文化学園大）岡本光宏（日本施設）祐川英基（祐川環境カンファレンス）遠藤孝二（環境管理センタ）

西栄子（味の素ファイン）佐藤博（長崎国際大）伊藤英武 五十嵐英則 大林真人 高山洋一（近江兄弟社）

阿部享一（釧路技研）平林憲次 村上栄造（朝日工業社）松本雄成（東洋興商）高橋通正（神奈川環境科学センタ）

山口靖（荏原実業）諸井澄人（環境技術研究所）中後晶久（荏原実業）樋口篤志（アイダッシュ） 参加者 22 名

1. 講演報告

演題「三宅島の火山ガス（有害ガスと臭気）対策」 講師 中津山憲 殿（元 北炭化成工業）

当対策に関わることになった経緯が説明された。三宅島の位置が説明された。恥ずかしながら、報告者（伊藤）は大島、利島、新島、式根島、神津島のほぼ延長上に三宅島があるかのようにイメージしていたが、東側にずれていて竹芝桟橋から直航行ルート（竹芝→三宅→御蔵→八丈）でいくような位置にあった。

現地では対策本部のある神津島をベースとして、チャーター船で三宅島へ通ったとのこと。海があれったり噴火ガスが港に漂ったりで、引き返すこともたびたびで待機時間も多かったとのこと。除害・脱臭装置など諸対策のための調査などを行なったとのこと。

触媒添着活性炭（S-Cat）で硫化水素と亜硫酸ガスを除去できるメカニズムが説明された。硫化水素は酸化されて亜硫酸ガスとなり、最終的には硫酸（揮発しないので、際限なく吸着保持される）という形で除去されるとのこと。S として吸着保持されるものもある。アルカリ添加炭、酸化剤添着炭をもちいての浄化テストも行なったが、すぐにブレイクし使用には耐えないことが分かった。S-Cat は触媒として機能し亜硫酸ガスと硫化水素を吸着しやすい物質に変化させるので、吸着保持能力を大きくできる。そのため、実用できることが判明した。

地中に埋まった木など有機物由来によるにおいもあり、亜硫酸ガス、硫化水素に限らず、においの原因物質は他にもいろいろあると考えられた。塩酸ガスも検出された。それは海水由来によると思われる。

完成した外気浄化設備の実稼動状況については、実際の入口負荷ガスが意外に低濃度であり装置には余裕が生じたため、十分な機能を発揮することが出来ているとのこと。

現在は噴火も落ち着き、亜硫酸ガス、硫化水素の影響は少なくなっている。家屋の「被害状況調査」を行なっている際、個別の家屋の痛みがはたしてこのガスによるものか、もともと痛んでいたためなのか、という判断が難しい事項あったとのことであった。現地の生々しい状況がスライドで提示され、臨場感を持ってお話を聞くことが出来た。

川崎市の大工場では、1日の亜硫酸ガス排出量が大体 1000 t である。三宅島では、被害が最も激しかった平成 12～13 年の記録では日量 20000 トン～80000 トン排出していた。川崎市の大工場が 20～80 ケ集中して存在しているイメージである。18 年以降は日量 5000 トン以下となり、現在では高濃度時の 100 分の一程度まで低下しているとのこと。

対策に用いたクリーンハウスは内圧をあげ有圧として用いた。島全体で S-Cat 方式の脱硫装置を 75 機設置した。

2. 意見交換会

祐川さんより、一般生活者における悪臭苦情について、最近の対応事例・提案などの経験談が披露された。

事務局より、臭気判定士試験問題の最近の傾向が説明された。試験問題は高度化している、又臭気判定士の方には知っておいてほしい事項も散見されるので、当会の方々も、ぜひ最近の試験問題に取り組んでみてほしい。におい・かおり環境協会からのメッセージを感じとることができるとのことであった。

